

# コロナウイルス文献情報とコメント(拡散自由)

2021年11月20日

## Science論説：小児への新型コロナワクチン接種

### 【松崎雑感】

集団免疫の形成のためには、小児への新型コロナワクチン接種が必須であるという論説です。熱がこもっています。

ワクチンの副作用の大きさと、新型コロナに自然感染した場合の健康影響を比べて、ワクチン接種をして新型コロナの重症化を減らした方がずっとメリットがあるというものです。

## 論説：小児への新型コロナワクチン接種

Gerber JS (associate professor of Pediatrics and Epidemiology, University of Pennsylvania Perelman School of Medicine, Philadelphia, PA, USA and deputy director of the Center for Pediatric Clinical Effectiveness at Children's Hospital of Philadelphia), Offit PA. **COVID-19 vaccines for children.** **Science.** 2021 Nov 19;374(6570):913. doi: 10.1126/science.abn2566. Epub 2021 Nov 18. PMID: 34793207.

今月初めにCDCは5～11歳の小児2800万人にファイザービオンテックワクチン接種を勧奨した。しかし、保護者の42～66%は小児への新型コロナワクチン接種を躊躇あるいは、ワクチン免疫付与を希望しないという調査結果がある。

ワクチンを受けない場合、子どもも含めて、今後新型コロナウイルスに必ず感染することになるだろう。したがって、保護者に対して、ワクチン接種と自然感染のどちらが危険かの判断が迫られることになる。

間違いなく、新型コロナは小児の病気である。2020年の初頭に米国に新型コロナウイルスが流入したが、当時小児感染は全感染者の3%に満たなかった。現在感染者の25%以上が小児である。これまでに600万人以上の小児、中でも200万人の5～11歳児が新型コロナに感染している。

2021年10月末の時点で、毎週10万人の小児が感染している。数万人の小児が入院しているが、その3分の1は基礎疾患のない子どもたちであり、ICU治療の必要となる小児も多い。これまでに700名が新型コロナで死亡しており、新型コロナ感染は米国の小児の死因のトップ10となっている。しかし、ワクチン接種により死亡した小児はいない。

小児に対するファイザービオンテックワクチンの安全性が十分に検証されていないという懸念を多くの保護者が抱いている。デルタ株流行中に5～11歳児2400人に対するワクチン効果を調査したところ、ワクチン接種が有症状感染を90.7%低下させたことが分かっている。

一方ファイザー社の第Ⅲ相トライアルでは成人4万人を対象としている。CDCは成人のトライアルに比べて、ずっと少数の小児を調査しただけで、心筋炎という新たな副作用の問題が分かってきたにもかかわらず、なぜ、小児における安全性が確認されたという結論を出したのか？

認可後に行われた調査では、mRNAワクチンによる心筋炎が100万人あたり5人発生すると報告された。とりわけ若い男性では1万人に1人という高い発生率だった。

ワクチン接種後の心筋炎は概して軽症で、速やかに収束する。一方新型コロナウイルス感染あるいは多臓器炎症症候群による心筋傷害は心不全をもたらす、救命的治療が必要となることが多い点で、根本的に異なっている。イスラエルと米国での調査によれば、12～15才児のワクチン関連心筋炎発症率は16～25才の年齢層よりも低かった。また、12～15才児へのファイザーワクチン接種量は、16～25才層の3分の1とされており、年少児における心筋炎リスクはさらに低くなると予想できる。

ワクチン接種のリスクベネフィットを検討するうえで、心筋炎は問題のごく一部である。登校し、友人と遊び、学校外の社会活動も通じて精神的成長を培うことが子どもたちには必須である。

子どもたちの人生そのものをどう豊かなものにするかが大事である。2021年8月以降、2千以上の学校が新型コロナ流行により、閉校を余儀なくされ、100万人以上の子どもたちが学びの機会を奪われた。学校生活ができないことは、メンタルヘルスの悪化、学力格差の増大、身体活動低下などをもたらすため、現在までに分かっているワクチン接種がもたらすデメリットを上回る悪影響が生じている。

さらに、有色人種、先住民民族、貧困層ほど新型コロナウイルス感染の悪影響に見舞われ、社会的格差がより大きくなる。通常のヘルスケアと定期的ワクチン接種の実施が後回しとなり、将来の疾病負荷の増大が懸念される。さらに、ワクチンを受けない子どもたちから、保護者への新型コロナウイルス感染のおそれがあり、パンデミックで疲弊している保護者にさらに大きな負荷をもたらす。

そして、子どもたちが成長して、大人社会の一員となったときに、国全体として、新型コロナウイルス感染症に免疫を持つようにすることが必要である。これを数年以内に達成する必要がある。したがって、すべての子どもたちにワクチンを接種することが、米国市民の健康を改善する上で最も有効な対策である。

多くの子どもは新型コロナウイルスに感染しても無症状あるいは軽症で済むが、中には重症化し、死亡する場合もある。ずっと以前からインフルエンザ、髄膜炎、水痘、肝炎などに対するワクチン接種は当たり前のこととなっているが、ワクチンが開発される前にこれらの感染症によって死亡した人々の数は、新型コロナウイルスによる死亡者よりもずっと少なかったという事実を想起されたい。

子どもへのワクチン接種を躊躇する保護者の気持ちは理解できる。しかしながら、ワクチンを受けないことで、望ましくない結果をさけられるという考えは間違いである。

ワクチンを受けなければ、別のもっと重大なリスクにさらされるという事を指摘したい。

医学医療専門家は、市民にこのことをしっかりと説明し理解を広げる努力をすべきである。子どもたちに新型コロナワクチンを接種するという決断は最も重要な健康を守るための決断である。